

人間は生きもの、自然の一部 ～ JT 生命誌研究館の基本～

JT 生命誌研究館 表現を通して生きものを考えるセクター チーフ 村田 英克

1 21世紀のいのちの学堂

ルネサンス期の画家ラファエロの描いた「アテナイの学堂」(写真1)をご存知ですか？



写真1 「アテナイの学堂」

文芸復興の時代に古代ギリシアの哲学者たちの群像を描いた絵画です。中央で語り合う二人の立姿に注目すると、向かって左側の人物は右手の人差し指で天を示し、もう一人は右腕を前へ差し出し五本の指を広げ掌で地を示しています。見えているものの背後にある統一的原理を、思惟によって客観的実在として把握するアイデア論を説いたプラトンと、この世界に多様な姿形をもって現れる一つ一つを実在と受け止めて、あらゆる存在を体系的にとらえようとしたアリストテレスの二人です。西洋で学問の体系化が試みられた際、プラトンは普遍性(共通性)を、アリストテレスは多様性を、その基盤と考えました。現代の生命誌研究においても共通性と多様性は大切な基本です。ここで、プラトンの対話篇から師ソクラテスの言葉を引きます。「生きることでなく、よく生きることをこそ、何よりも大切にしなければならない」(註1)。このような言葉から、学問の自由を求めて、プラトンがアテナイの学堂を開設した思いが

汲み取れるのではないのでしょうか。当時の哲学・数論・幾何学・天文学・音楽理論、そして自然科学は、人間がよく生きるために学ばれるものであったはずです。

1993年、大阪府高槻市に設立したJT生命誌研究館は小さな組織ですが、「私たちがよく生きる基盤は、自然をよく知ることにある」と考えて、小さな生きものに眼を向け、生きものが持つゲノムDNAを読み解き、地球上に暮らす多種多様な生きものが、どのように生まれ(発生)、世代をつなぎ(進化)、関わりあって(生態系)生きているのかを探っています。「人間も生きものの一つ、自然の一部」という認識から、生命科学を基盤としながらあらゆる学問、芸術など多様な分野はもちろん、日常生活を大切にしながら「よく生きる」ことを求めての新しい総合知の構築に向けて活動しています。

2 いのち愛づる館

平安時代に編まれた物語集『堤中納言物語』に「蟲愛づる姫君」という短編があります。ここで語られているのは、今から千年ほど昔の日本で、小さな虫たちをつぶさに観察し、そこに生きる力のすばらしさを見出し、それを愛づるお姫様です。生命誌研究館の展示ホールに入ってすぐ眼に止まる展示「蟲愛づる姫君」(写真2)は、お姫様の語る言葉にのせて、チョウ・カエル・クモ・コバチなど小さな生きものを通して38億年の生命の歴史を解き明かす生命誌の研究を紹介しています。

「よろづの虫の恐ろしげなるをとり集めて、これがならむ様を見む」とは、そのまま現代の生物学者の言葉でもあります。チョウの発生や進化を知りたいければ、こちらからチョウの生きる時間に寄り添い「これがならむ様を見む」との心持ちで

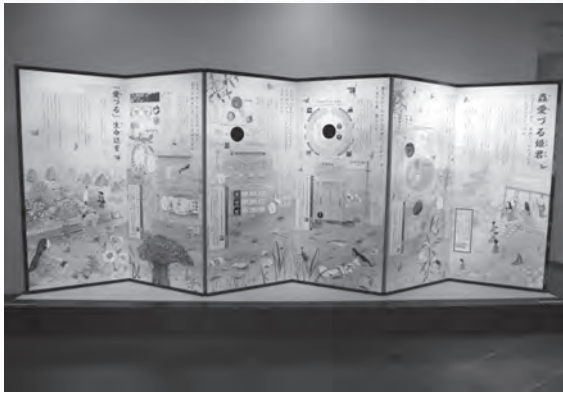


写真2 「蟲愛づる姫君」

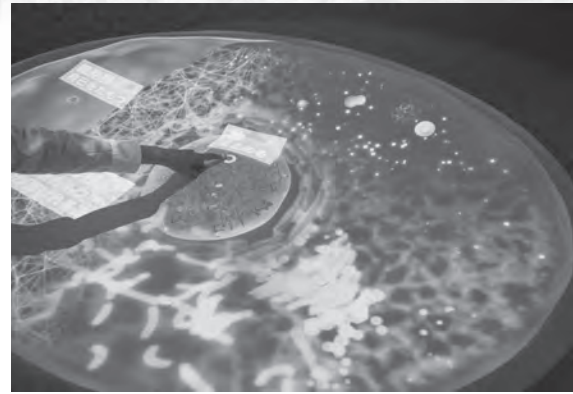


写真3 プロジェクション・マッピング映像の投影

観察する姿勢が求められます。「かは虫の心ふかき様したるこそ心にくけれ」と、美しいチョウになる日に思いを馳せて、掌で毛虫を可愛がるお姫様の姿から浮かび上がる「愛づる心」は、現代にも通ずる「時間をかけて生きものに向き合う」という生きもの研究の基本を表しています。私たちは、生命誌研究館の展示ホールを、生きものが持つ38億年という時間で満たしています。それは、人間にとっての利便性や効率だけを優先して、その物差しに合わないものを切り捨てる現代の人間社会とは異なる価値に基づく、生きものが生まれながらに自らの内に持ち、発生・進化・生態系を展開する時間です。展示ホールにはこの静かな時間が流れています。一度、味わってください。

「生きていること」に向き合う基本の展示として、もう一つ「細胞展」を紹介します。すべての生きものは細胞からなります。「生きている」ことのいちばん小さなまとまりは細胞という単位です。38億年前に地球の海で細胞が生まれて以来、細胞は細胞からしか生まれずに今に続いています。

細胞について現代生物学がどこまで明らかにしたか、様々な知見を集めて、細胞という不思議を考える展示をしています。昨年から、研究動画の収集とコンピュータ・グラフィックスの描画を生かして、生きた細胞のはたらきを再構築したプロジェクション・マッピング映像の投影（写真3）を始めました。今年は、更にその細胞が、日常の中で、あなたの体をいつも支えているという実感を持てる空間となるように展示の仕上げを試みて、8月上旬に完成しました。あなたの体の細胞をたずねて、是非ご来館ください。

3 生命誌から生まれた世界観

生命誌研究館は、今年、創立25周年を迎えました。開館以来、取り組み続けているのが、「生きている」を見つめ「生きる」を考える季刊「生命誌」の発行です。全国どこでもお読みになれます。2002年から、毎年、テーマに「語る」「編む」「生（な）る」など動詞を一つ選んで、その切り口から「生きている」ことを考える物語として編集しています。他にない独自の表現を求め、3つの媒体で制作しています。1)全文が読めるインターネット記事はページ数の制約なくイラストや動画をあわせてじっくりと読み込むことができます。2)物語のエッセンスを凝縮して伝えるカード形の印刷物は申し込みに応じて無料で発送しており、洗練した言葉と図像で視覚的・直感的に伝えます。また付属の紙工作も人気です。3)そして、年間テーマを書籍名に冠し一冊で年4回の内容を通読できる年刊号書籍は全国の書店で購入可能です。最新刊は『ゆらぐ』、10月には『和 -あえる・なごむ・やわらぐ・のどまる- (仮)』を発行予定です。

創刊から25年を経て、約800件にのぼる小さな物語をホームページに蓄積しています。「生きていること」を考える様々な生きもの研究や多分野との対話、そして研究者へのインタビューに基づく研究人生の物語です。これらの小さな物語の一つ一つを集めて「生命誌」という物語集を編む試みが「生命誌アーカイブ」（註2）です。ホームページからご覧になれます。その入り口に描いた一枚の俯瞰図が「生命誌から生まれた世界観」（写真4）です。



写真4 「生命誌から生まれた世界観」

絵の中心で、鏡に映る裸の「ヒト」は、生きものの一つとしてのあなたです。あなたは生命38億年のつながりの中で、発生・進化・生態系を生きる自然の一部です。一方、衣服を身に纏い鏡に映る自分を見ている「人間」は文明社会の一員としてのあなたです。多様な生きものの中で唯一、言葉や道具を用いて築いた文明の中で人生・歴史・社会を生きています。この俯瞰図は「人間は生きものであり自然の一部である」という認識に基づく生命誌の世界観を物語っています。ホームページの「生命誌アーカイブ」は、生命誌に関心を持つ一人一人が、この図の示す世界に入って、一つ一つの物語から「生きている」ことを考え、思い思いに物語のつながりを楽しみ、これからをいかに「生きる」かと考えるために開かれた場です。是非ご覧くださってご意見をお聞かせください。

4 「水と風と生きものと」生命誌の広がり

「水と風と生きものと 中村桂子・生命誌を紡ぐ」(註3)というドキュメンタリー映画をご存知ですか？2015年に劇場公開し、札幌から鹿児島まで全国約40ヶ所での上映を経て、現在も自主上映会向けに提供を続けています。映画では、生命誌研究館の着想の経緯や「日常と科学の重ね描き」への思いを中村桂子館長が語り、研究館の日常である小さな生きものを見つめる研究とその表現と交流を伝えます。実際の生命誌研究館の活動を三年間追って綴られた「いのち」をめぐる物語です。映画を構想した2012年は、東日本大震災の直後でもあり、自然を生かした文明(科学技術)の構築を強く意識した作品ともなっています。被災地

に日常を取り戻すために何が必要かを考え「みんなの家」を各地に展開する建築家の伊東豊雄氏、自然エネルギーだけで自活する村を構想する風の彫刻家の新宮晋氏など、「いのちを大切にする社会」を求めるそれぞれの思いは、生命誌と重なることが、映画の中での中村館長との語り合いから浮かび上がります。映画には喜多方市小学校農業科の授業の様子も登場します。春、地域の農業指導員の協力の下、子供たちは自ら耕した畑にトウモロコシの種を蒔き、毎日の水やりを欠かさず、秋にその収穫を味わいます(写真5)。



写真5 喜多方市小学校農業科の授業の様子

「食べものは、みんな、生きものです」という中村館長の授業に続いて、みんなでトウモロコシをいただくシーンは、どの上映会場でも客席から笑いが溢れます。喜多方市では、中村館長の提案に基づき2006年に市内の小学校に農業科を導入し、今では市内の全小学校で農業科を実施しています。生命誌の映画とともにこうした取り組みが全国に広がることを願っています。この映画が日本全国で上映の広がりを得たのは、実は、各地で農業や環境、生活や文化をテーマに活動している方々が、強い関心を持って上映会を企画してくださったおかげです。上映会は映画だけでなく、生命誌の生きもの研究の物語をどこでも楽しめる「出張生命誌展示」セットの無料貸し出しや、卓上で生きものの進化を楽しめる紙工作やトランプなどの研究館グッズの紹介、更に研究館のスタッフが伺ってのトークなどもあわせて実施しています。これからも「いのちを大切にする社会」の実現に向けて、それぞれの地域に根ざして活動する方々と一緒に、「生きている」ことを考える場づくりに取り組みたいと思っています。ご関心のあ

る方、是非一度お声がけください。

5 「よく生きる」知恵を生み出す場

2018年9月1日発行予定の季刊「生命誌」98号に、「物語を伝承する生きもの」という題で、脳神経内科のお医者様である岩田誠先生と中村館長の対談を掲載します(註4)。ヒトはなぜ「表現」するのかという問いに迫るご著書『ホモ ピクトル ムジカーリス』(註5)を上梓された岩田先生は「生きものの中でヒトだけが、言葉をしゃべり、絵を描き、歌を歌い、音楽を奏で、踊り、演じる。それはなぜか。」と考えます。

私たちホモ・サピエンス(新人)が狩猟採集の生活をしていた時代の表現物がラスコーやアルタミラなどの洞窟画や装飾品などの形で遺されています。洞窟の壁に、生き生きと描かれた獰猛な大型動物の絵画は描き手の勇敢さを示し、集団間の縄張りを主張するものであったというのが岩田先生のお考えです。洞窟に遺された具象画を見れば、描き手の並々ならぬ観察眼、記憶力、そして描写力が窺え、現代の科学の眼と表現の心に響くものを感じます。更に最近の調査で六万年前に描かれたとされる洞窟画はどれも抽象的な図形で、これは旧人が描いたものとされます。岩田先生は、新人が獲得したと考えられる「具象画を描く能力」は、言葉を喋る能力と関係するということ、脳研究と絵を描く子供の日常の観察から導き出されました。対象を名付けて分節し、統語により言葉を連ねて自らの経験や知識を語り伝える、物語る力を持つのが私たちホモ・ピクトル・ムジカーリスなのです。音楽の場合は、楽器がつくられる前の歌や手拍子は形に残りません。しかし、シャーマンが鼻笛を吹いて踊っているように見える洞窟画が存在します。絵画洞窟は音の響きもよい場合が多いという音響調査の結果から、洞窟の絵画の前で、歌や楽器の演奏、そして踊りが営まれていたのではないかと考えられています。歌は、言葉によって、生存に必要な知識とともに、自然を敬い、畏れる感情も伝えたことでしょう。歌を楽器の演奏や踊りを伴う表現として継承することである種の型が生まれ、型があることによって、知識



写真6 「科学のコンサートホール」である生命誌研究館

となり得ない要素を含む、伝承可能な「知恵」が生み出されたのではないのでしょうか。そのことが、現代社会で軽んじられているように思えてなりません。

「科学のコンサートホール」である生命誌研究館(写真6)は、創設以来、研究と表現の両輪で活動してきました。

展示ホールは生命38億年の物語を伝える言葉と絵や映像に満ちた空間です。そして生きもの研究を研究者の声で語り、時に、「いのちの響き」を分かち合う音楽会も開きます。ここは、太古の洞窟につながる「よく生きること」を願い、そのために必要な知恵を生み出す場です。是非是非、ご来館ください。

=====
<記事に関するお問い合わせ>

JT生命誌研究館 表現を通して生きものを考えるセクター

Email: seimeishi@brh.co.jp

Tel.: 072-681-9796 (平日の9時～16時)

=====
<註>

※註1: 『「よく生きる」ことの哲学』藤沢令夫(岩波書店)1995年

※註2: 「生命誌アーカイブ」http://brh.co.jp/s_library/#view

※註3: 「水と風と生きもの」中村桂子・生命誌を紡ぐ」<http://tsumugu.brh.co.jp>

※註4: 季刊「生命誌」98号「物語を伝承する生きもの」岩田誠×中村桂子 <http://www.brh.co.jp/seimeishi/journal/098/talk/>

※註5: 『ホモ ピクトル ムジカーリス』岩田誠(中山書店)2017年